D・G・E・ホール編著

『東南アジア史の研究家たち』

D. G. E. Hall (ed). *Historians of South-East Asia.* London: Oxford University Press, 1961. viii+342 p.

I

本書は東南アジアの歴史研究 (historiography) に関する informative survey として書かれた25の東西の学者のペーパーを編集したものである。1956年から58年にかけて，ロンドン大学の School of Oriental and African Studies では，ロックフェラー財団の援助のもとに，同学において全アジアに関する歴史的著作 (historical writing) の展開過程と性格を調査し評価するための一連の地域別研究会議を開催した。本書所収のペーパーは本来，1956年に行なわれたこの東南アジア部会に対して提出されたものである。そこでは，まず部会の本会議に先だって用意された予備的セミナー・グループによって討論され，さらに部会の本会議においてこれに関する討論が重ねられた。

従来，第2次大戦終了前においてはとくに，東南アジア史に関する研究はその大部分が西洋および日本，中国などの学者によって進められ，現地人による重要な業績というものはほとんど皆無にちかい状態であった。こうした植民地時代の現地側一般における自国史に対する無関心，ひいては歴史学者の貧困は，この地域のほとんどが新興独立国家となって以後も大きく災いした。すなわち各国においては，その民族意識の高揚とも相呼応して，歴史家は，植民地時代に書かれた西洋学者の手になるヨーロッパ中心の東南アジア史に対して，自主的な国民史としての自国史に書き改めるという重大な課題を負わされたのであるが，この際歴史学者の数的なあるいは訓練上の不足はこの課題の遂行に大きなブレーキとなったのである。したがって現地側の歴史研究としては植民地時代からの一部の民族主義者の手になる反植民地主義的・民族主義的性格の強烈な歴史的著作のみが存在するにすぎなかった。また一方，西洋学者による研究にも問題がなかったわけではない。すなわち植民地時代の西洋各国の歴史研究は主として行政家により自国の植民地に対する植民地行政遂行のための研究に集中し，社会経済および思想史についてはわずかの業績しか残さず，まして多大の言語上の障壁を克服してはじめて可能となる他国植民地地域に対する研究はきわめて乏しいものであった。さらに第2次大戦後においては，これら西洋諸国は植民地の喪失により東南アジア地域に対する研究の停滞ないしは研究者の補充不足という事態を生むにいたっている。したがって戦後に要求された東南アジア史の再建という大きな課題にこたえるには，きわめて不充分な研究体制下にあったということができる。

したがって以上のような戦後の現地および西洋諸国における研究状況下においては，東南アジアの歴史研究に関する全範囲についての一般的な知識の獲得・整理と，そこから生まれる東西学者による共通の価値意識，問題意識の把握こそが，正常な東南アジア史の確立をめざす斯界の発展のために緊急に要請されていたことであった。しかもそうした試みが実現されたことはほとんどなかったのである。

本書成立の動機となった1956年のロンドン大学での研究会議が東西の学者を動員し，その会議の主要目的を当時までの東南アジア史研究に関する informative survey においたのは，こうした意味においてまことに有意義であったといわねばならない。本書所収のペーパーがその研究対象においてきわめて広範囲にわたって問題を取り上げているのも，この点から充分首肯されるところである。

なおこうしたペーパーは東南アジア以外の地域（南アジア，中近東および極東）部会においてもまったく同様の方法において討論されたわけであるが，研究会議終了後これらのペーパーは4冊に編集され，*Historical Writing on the Peoples of Asia* のタイトルのもとに公刊されることとなった。本書はその第2巻に当たるわけである。ちなみに他の3巻は C. H. Philips を編者とする Vol. I, *Historians of India, Pakistan and Ceylon,* W. G. Beasley と E. G. Pulleyblank を編者とする Vol. III, *Historians of China and Japan* および Bernard Lewis と P. M. Holt 編の Historians of the Middle East の諸冊より成るが，いずれも最近あいついで公刊されている。

本書の編者は，1956年当時ロンドン大学 School of Oriental and African Studies の東南アジア史教授であった D. G. E. Hall であるが，かれはつとに西欧における有数の東南アジア史家として令名あるところであり，本書の編者としてはまことに好適であるといえる。その著作としては全東南アジア史に関するまとまった最初の著作として高く評価されている *A History of South-*

East Asia (London, 1955) をはじめ本書とも関係深い東南アジア史学に関する学界展望として *East Asian History Today*. Lecture delivered in the University of Hong Kong on May 20th, 1959. (Hong Kong University Press, 1959. 18 p.—筆者未見) を発表している。またとくにビルマ史の専門家としてその多くの業績が高く評価されている学者であり，本書にもかれ自身ビルマ史研究に関する一文を執筆している。なおかれは本書出版にわずかに先だってChair of South-East Asian Historyの地位を去り，現在同学名誉教授の地位にある。

つぎに本書の構成であるが，まずSchool of Oriental and African Studies のDirectorであるC. H. Philips教授の「まえがき」で，本書の成立事情について簡単にふれられており，ついで編者のHallによる「序説」があるが，そこでは前述したようなこれまでの東南アジア史研究に対する総括，評論がなされ，さらに現時点での問題点について研究会議での討論の内容および会議の成果にふれながら記述されている。この点についてはのちに若干言及したいと思う。

本論に当たる部分は2部に分かたれており，第1部，「土着の著作」(Indigenous Writings) にはこれに関する9つのペーパーが含まれ，第2部，「西洋の著作」(Western Writings) では16の関係ペーパーが収められている。このように本書はポルトガル，スペイン，イギリス，オランダ，フランスおよびアメリカといった西洋諸国の歴史家の著作について取り扱っているのみならず，限られた方法においてではあるが現地語で書かれた歴史的著作についても取り上げており，この点に本書の最大の特色を見いだすことができる。最後に6ページにわたる索引が付されている。

以上が本書の構成の大略であるが，340ページを越える本書は，24人の一流専門家によるその記述内容の優秀さにおいてはもちろんのこと，従来斯界における類書の欠如とも相まってその出現の意義はまことに大きいものということができよう。

II

本書所収の25のペーパーについて，その内容を詳細に紹介批評することは筆者の能力をこえる至難のわざであり，また紙数の関係もあってとうてい望みうべくもない。そこでまず第1部，「土着の著作」についてのペーパーから以下順次そのタイトルをかかげ，これに簡単なコメントを付すことによって読者がそれらのおのおのの内容をうかがうための参考に供したい。

(1) C. C. Berg (ライデン大学): Javanese Historiography—A Synopsis of its Evolution

インドネシア語を話す地域では多くhistoriographyのなんたるかが知られていないこと，ジャワの年代記のシステムには固有文化の発展と同時にインド文化の影響をうけたその国の文化史的性格が反映していること，さらにジャワ語テキストには呪術的性格が強いことなどが述べられ，結局ジャワ語記録は一般に信頼できないと結論している。

(2) R. O. Winstedt (前ロンドン大学講師): Malay Chronicles from Sumatra and Malaya.

マレー，スマトラのマレー語によって書かれた主要年代記について考察し，マレー人の心には近年まで事実とフィクションとの明瞭な区別がなかったと述べている。

(3) J. Noorduyn (Netherlands and Indonesian Bible Societies): Some Aspects of Macassar-Buginese Historiography.

セレベスの各地においてみられる年代記の検討を行ない，この地方がインドネシアの他の地域と影響しあうことなく独自の発展をとげてきたものと推定している。

(4) A. Johns (Canberra University College): Muslim Mystics and Historical writing.

歴史研究の立場から，歴史叙述の一例としてMuslim Mystical Writingの価値を検討している。

(5) U. Tet Htoot: The Nature of the Burmese Chronicles.

ビルマの年代記は多くこの世の無常を示し，王以下の人間にmoral instructionを与えることを目的として編さんされ，ありのままに叙述することを原則としていたとする。

(6) H. L. Shorts (ロンドン大学): A Mon Genealogy of Kings: Observations on *The Nidāna Ārambhakathā*.

ビルマに最も関係深いモン人の王室系譜についての考察を行なっている。

(7) Bambang Oetomo (ライデン大学): Some Remarks on Modern Indonesian Historiography.

西欧的近代教育をうけたインドネシア人によってあらわされたインドネシア語の歴史的著作について検討している。

(8) Tin Ohn (ラングーン大学): Modern Historical Writing in Burmese, 1724～1942.

ビルマ語で書かれた歴史文献について，形態的および史学史的考察を展開している。

(9) P. J. Honey (ロンドン大学): Modern Vietnamese Historiography.

ヴェトナムに関する現地人学者および西洋学者の歴史研究について史学史的検討を試みている。

以上の諸論文でほぼ共通して承認している1つの点は，東南アジアの土着の伝統的な歴史的著作（とくに王室や寺院の年代記など）はほとんどが王の権威を支持し宗教儀礼の根拠を提供することを目的としたものであるということである。この地域の伝統的な historiography が一般に空想的な系譜であったりあるいは英雄物語や神話伝説の地方的摂取といった性格のものであることはこれを否定しがたいであろう。

以上のような政治的・文学的偏向に加えて，現地史料には断片的な性格が強く，ために西洋勢力との接触以前の東南アジア史はわずかな現地の碑銘的記録，考古学的遺物および中国史料中の関係記録などによって再構成せざるをえないのである。しかし今後はこうした現地の伝統的著作についても新しい視点からの歴史的分析を行ない，それらに対する再評価が行なわれなければならないことはいうまでもない。

なお本書では土着の歴史著作としてカンボジアとタイのそれが独立したテーマのもとに取り上げられておらず，わずかにフランス学者のインドシナに関する歴史研究に付随して一言言及されているのみであるが，これははなはだ不充分であると考える。それらについては筆者も若干検討したことがあるが，史料の乏しい当該地域の歴史研究にとってはやはり不可欠のものであり，本書においてももっと重視して取り上げられるべきであったと考える。

引き続いて，第2部「西洋の著作」について簡単に紹介する。

(10) A. H. Christie (ロンドン大学): Some Writings on South East Asian pre-History.

主として Dong-son 文化の問題を中心に取り上げ，これに対する Heine-Geldren, Karlgren などの研究方法を批判している。

(11) J. G. de Casparis (ロンドン大学): Historical Writing on Indonesia (Early Period).

諸学者のインドネシア史研究の時期を，18世紀以後1926年まで，1926年から42年まで，さらに1942年から56年までというように3分し，その各々の時期の研究について検討している。

(12) C. C. Berg (ライデン大学，前出): The Work of Professor Krom.

Krom教授の業績を Hindoe-Javaansche Geschiedenis, 1931 を中心として批判している。

(13) 故 I. A. Macgregor (前シンガポール・マラヤ大学講師): Some Aspects of Portuguese Historical Writing of the Sixteenth and Seventeenth Centuries on South East Asia.

主として1516年から1650年に至る期間のポルトガル人の歴史的著作を取り上げ，それらを Reports, Secular History, Ecclesiastical History に3分して考察している。

(14) C. R. Boxer (ロンドン大学): Some Aspects of Spanish Historical Writing on the Philippines.

スペイン人のフィリピンに関する歴史研究の業績について史学史的考察を行ない，そこに強い宗教的性格が存在することを指摘している。

(15) H. J. de Graaf (ライデン大学): Aspects of Dutch Historical Writings on Colonial Activities in South East Asia With Special Reference to the Indigenous Peoples during the Sixteenth and Seventeenth Centuries.

インドネシア史に関するオランダ人の研究を取り上げている。

(16) W. Ph. Coolhaas (ユトレヒト大学): Dutch Contributions to the Historiography of Colonial Activity in the Eighteenth and Nineteenth Centuries.

18，9世紀におけるオランダのインドネシアに関する歴史研究について各世紀別に考察している。

(17) Jean Chesneaux (École Pratique des Hautes Études): French Historiography and the Evolution of Colonial Vietnam.

フランス植民地時代のインドシナに関するフランス人の歴史研究を，Memoirs and Recollections, Economic Monograph, Reports and Essay, Compilations に分けて検討を加え，それらを批判している。

(18) B. Harrison (香港大学): English Historians of 'The Indian Archipelago': Crawfurd and St. John.

2人のイギリス人 Crawfurd と St. John との東南アジア島嶼地域に関する著作についてその歴史研究としての価値を考察している。

(19) D. G. E. Hall (ロンドン大学名誉教授): British Writers of Burmese History from Dalrymple to Bayfield.

ビルマ史研究の最初の著作たる Dalrymple のそれから Symes, Crawfurd, Burney を経て Bayfield に至るまでの業績を検討している。

(20) Hugh Tinker (ロンドン大学): Arthur Phayre and Henry Yule: Two Soldier-Administrator Historians.

イギリスの2人の東南アジア史家 Phayre と Yule を取り上げて，両者の生涯，著作を比較検討している。

(21) C. D. Cowan (ロンドン大学): Ideas of History in the Journal of the Malayan (Straits) Branch of the Royal Asiatic Society, 1878～1941.

Malayan Branch of the Royal Asiatic Society における東南アジア史研究について考察している。

(22) L. A. Mills (ミネソタ大学): American Historical Writing on South East Asia.

アメリカ人による東南アジア史研究の概観し，主として1940年代のものを取り上げている。

(23) L. Malleret (元 L'École Française d'Extrême-Orient): The Position of Historical Studies in the Countries of Former French Indo-China in 1956.

今世紀初頭に設立された極東学院を中心とするフランス人学者——Cordier, Maybon, Pelliot, Maspéro, Cœdès, Gaspardone, Groslier, Dupont など——のインドシナに関する歴史研究について概観している。

(24) C. Hooykaas (ロンドン大学): A Critical Stage in the Study of Indonesia's Past.

インドネシア史研究についての現状とその問題点に関して考察している。

(25) A. W. Macdonald (Centre National de la Recherche Scientifique): The Application of a South East Asia-Centric Conception of History to Mainland South East Asia.

東南アジア大陸部の歴史研究に関する方法論を South East Asia-Centric アプローチとの関連において検討している。

以上につい簡単に概観すると，ここでは Krom, Crawfurd, Bayfield, Raffles, Phayre, Yule などといった従来の東南アジア史研究における古典的業績を残した著作家たちにはそろって批判的評価が与えられている。たしかに上記の著作家たちはすべて専門の歴史学者としての訓練を受けていないために，その業績の歴史学的成果という点で大きなハンディキャップをもっていたことは否定できないようである。また第2部の論文のうち最も穏当な判断だと思われるのは de Casparis のインドネシアに関する20世紀のオランダ人の著作についての評価とか，Macgregor のポルトガルの歴史家に対するそれであり，さらには Boxer のフィリピンに関するスペイン人の著作に対する批評などであろう。

以上，1，2部のペーパーを通じてそこに取り扱われた地域，時代および問題点は非常に多岐にわたっている。しかし Hall も認めているように，本書にはなお取り扱うべくして取り扱いえなかった多くの問題が残されていることはたしかである。

いまそのうちの重要な1，2の点について簡単に指摘すれば，まず本書には重要な東南アジア史料としての中国史料に関する言及が皆無にちかい。このことは，中国史料がとくにヨーロッパ勢力との接触以前の東南アジア史の研究にとっては不可欠のものであることを考え合わせるとき，本書の1つの大きな欠陥として挙げざるをえないものである。つぎに西洋人による東南アジア史研究のみが取り上げられ，日本，中国など東洋の学者による研究が取り上げられていないのも片手落ちというべきである。以上の2点を補足する日本語文献として，やや古いけれども石田幹之助氏の『南海に関する支那史料』，(東京，1945年) および山本達郎博士の執筆にかかる「東洋史，東南アジア」，(『日本における歴史学の発達と現状』，(東京，1959年) 所収) を紹介しておく。

III

最後に本書と最近の東南アジア史学界における研究状況との関連について一瞥しておきたい。近年斯学界が直面している最大の問題が植民地時代に書かれた東南アジア史に対する書き改めの問題であることはさきにもふれたとおりである。なかんずく東南アジアの新興独立諸国家の歴史家たちは，現在それぞれの自国史の再建という大きな課題に向かって努力を傾注しつつあるのである。そこには多大の困難が横たわっている。本書所収の Macdonald の論文では，文化パターン，言語および史料において非常に複雑な性格を有する当該地域の歴史的諸研究の困難性が強調され，1人の学者によっては，たとえ総合という点でなにがしかの努力は期待できても，東南アジア史研究の全分野をカバーすることはとうてい不可能であるとの結論さえくだされている。あまりに悲観的な結論であるようにも思われるが，学界の現状は残念ながらこれに近いといわざるをえない。なおこうした研究の制約諸条件のうちとくに痛感される言語上の障壁についてはロンドン大学での研究会議においても大きな問題として取り上げられ，具体的な障壁打開策として，(1)他言語で書かれた重要な歴史研究業績の英語への翻訳，および(2)東南アジアの土着史料の英語版作製の実施が，

写本のマイクロ化，rare book の写真版作製などとならんで強く主張されたのであった。

一方，同じ会議において，歴史書き改めに際して最も重要な内容面の問題として，伝統的な歴史に対する新解釈，新評価が主要なテーマとされ，なかんずく植民地時代の東南アジアと独立後のそれをいかに連続的・統一的かつ主体的に把握するかについて Centric Approach の問題をふくめて活発に討論されたのである。しかしこうした問題は短期間で容易に解決することは困難であり，現在においても引き続いてはげしく論議がたたかわされているところなのである。たとえば昨1961年1月シンガポールのマラヤ大学で開催された「第1回東南アジア歴史家国際会議」(First International Conference of Southeast Asian Historians)においても，あるいは同年12月インドのニューデリーで開かれた「アジア史会議」(Asian History Congress)においても，会議で最も関心を集めかつ討論されたのは，ほかならぬこの歴史の再評価・書き改めの問題であったのである（シンガポールでの会議については出席者板垣博士の報告「第1回東南アジア歴史家会議に出席して」，『一橋論叢』，45の6により，ニューデリーの会議についてはやはり同会議の出席者たる山本博士の報告「インドで開かれた二つの国際会議」，『歴史学研究』，No. 265 によった）。

そうして，このような討論の積み重ねのなかから，従来の帝国主義的歴史と民族主義的歴史との対立という現実から一歩を進め，両者にみられる偏見を極力排除し，かつ利用可能な史料の批判的吟味と科学的処理を通じての新しい東南アジア史の建設へ向かおうとする正しい自覚がアジア人学者間にわきおこってきつつあるのである。このことは斯学の発展にとって非常に大きな光明であり，今後このような基本線上に立つ東南アジア史研究の発展が切望される。それがとりもなおさず自主的な地域史としての東南アジア史を生み，東洋と西洋の人々の間に真に正常な関係を樹立する動きとなることを意味するものと思われる。

このように新しくまた急速に発展しつつある東南アジア史研究の分野において，その先駆者的努力としてかつまた今後の研究の基礎として，本書は学界に対してまことに顕著な貢献をなしたものということができる。本書は東南アジアに関心を有する人々にとって，一読に値する好文献である。

（アジア経済研究所調査研究第2部　高橋　保）

「アジア経済」に関する懸賞論文募集要領

1. 論文題目および枚数　「アジア経済の将来」400字詰原稿用紙30枚（引用文献は出典を明記のこと）
2. 主　　催　アジア経済研究所
3. 後　　援　毎日新聞社
4. 応募資格　満32才未満のもの　応募者は氏名（ふりがな）・生年月日・学歴（専攻課目）・所属および職名を明記のこと。
5. 締　　切　昭和37年9月1日（土）（当日の消印あるものは有効）
6. あ て 先　東京都中央区銀座東6の7（木挽館新館内2階206～8号室）
   アジア経済研究所分室広報出版部（書留郵便または直接持参のこと）
7. 審査方法　(1) 論文審査　応募論文を審査し9月7日（金）若干名を第1次合格者として発表する。入選者は速達便または電報をもって本人に通知するほか，毎日新聞紙上に掲載する。
   (2) 口頭試問　第1次合格者にたいしては9月28日（金）午前10時からアジア経済研究所会議室において改めて口頭試問を行ない，即日最終順位を決定する（面接の際は身分証明書を持参のこと）。なお地方在住者が口頭試問のため上京する場合の旅費は，主催者において往復の実費を負担する（到着後支払い）。
8. 発表方法　1等入選論文は要旨を毎日新聞紙上または「エコノミスト」誌に掲載するほか全文を研究所和文機関誌「アジア経済」に掲載する。
9. 賞金・賞品　1等（1篇）10万円　2等（1篇）3万円　3等（1篇）1万円。
   このほか1等入選者には通商産業大臣賞を授与する。
10. 特　　典　入選者にたいしては向う1年間アジア経済研究所の機関誌を贈呈し，研究所が主催する各種の会合に聴講の便宜を与える。
11. 主なる審査員（順不同・敬称略）
   委員長　アジア経済研究所所長　東畑精一，委員　一橋大学名誉教授　赤松　要，慶應義塾大学教授　山本　登，一橋大学教授　板垣与一，通商産業省通商局経済協力部長　井上　猛，毎日新聞社経済部長　福井信吉，アジア経済研究所理事　川野重任。